

民間感覚を常に意識



徳永 繁樹 市長

平成15年、愛媛県議会議員選挙に立候補し初当選以来、5選。令和2年12月、県議を辞職。令和3年2月に行われた今治市長選挙で初当選。野球少年でポジションはピッチャー。スポーツ全般、観戦も趣味。

イベント追い風に新しい光を

昨年2月に就任した徳永繁樹市長。新型コロナの感染拡大による生活や経済への影響、人口減少、少子高齢化など様々な厳しい課題のある中、徳永市長は「市民が真ん中」の実現のため、

→2年に比べ1・7倍の1597人が今治に来てくれました。魅力ある街づくりを掲げ、移住者支援にも力を入れてきましたが、移住者からは「住んでみると疎外感がある」という声も聞こえてきます。移住者に限らず、まだまだ市民の暮らしを直視できていないのではないか。その点について

記者 キャッチボールを重ねて議論を深め、皆さんと共に選択し、納得と共に歩みます。新たな道を切り拓いてまいります。

移住者に疎外感があることなど、現場をまわって話さないと気付かぬことですよね。よく臭く足を動かすことで、足を運ぶよう職員に伝えていきます。キーパーソンに会えない場合でも名刺一枚を置いてこいと。泥臭く足を動かすことでの対応です。自分たちが何をして、どう動くかです。特に役員はセクト主義で、縦割りで対応しがちです。それでは解決すべき課題に

対応できない。そこで若い職員を中心に府内を横断する17のプロジェクトチームを発足しました。長引くコロナ禍で、大変厳しい社会情勢です。市内の観光地や飲食店も感染防止対策をしっかりと継続しながら、ウイズコロナの明るい未来に向けた力強く舵を切り、市民一丸となって、この荒波を乗り越えていきたい。今年は3年ぶりの開催となる「おんまく」、10月には今治港開港100周年記念事業や「サイクリングしまなみ2022」と事業が目白押しです。こうしたイベント追い風にし、新しい未来の光を作り出していくことを思っています。市民の皆さん、今治の街と一緒に良くしていきましょう。

広報と傾聴に力注ぐ

国とのパイプもつながっています。民間企業の経営者のような感覚ですね。

記者 市長 ご存じですね。
市長 現場は県内だけではなく、コロナが鎮静化すれば、例えば東京の霞が関などにも今治市のPRが必要です。頻繁に足を運ぶよう職員に伝えていきます。キーパーソンに会えない場合でも名刺一枚を置いてこいと。泥臭く足を動かすことでの対応です。自分たちが何をして、どう動くかです。特に役員はセクト主義で、縦割りで対応しがちです。それでは解決すべき課題に

対応できない。そこで若い職員を中心に府内を横断する17のプロジェクトチームを発足しました。長引くコロナ禍で、大変厳しい社会情勢です。市内の観光地や飲食店も感染防止対策をしっかりと継続しながら、ウイズコロナの明るい未来に向けた力強く舵を切り、市民一丸となって、この荒波を乗り越えていきたい。今年は3年ぶりの開催となる「おんまく」、10月には今治港開港100周年記念事業や「サイクリングしまなみ2022」と事業が目白押しです。こうしたイベント追い風にし、新しい未来の光を作り出していくことを思っています。市民の皆さん、今治の街と一緒に良くしていきましょう。